

留学が日本人学生の文化的アイデンティティに 与える影響に関する一考察

—中国における留学生と本国の学生との比較を通して—

An Examination of the Effects of Studying Abroad on the Cultural Identity of Japanese Students

一二三 朋 子

HIHUMI Tomoko

The purposes of the present study were 1) to reveal the cultural identity of Japanese students, 2) to examine the effects of host-country's evaluation to Japan and Japanese culture on cultural identity, 3) to examine the structure of the cultural identity and intercultural adaptation. 113 Japanese students who study at universities in China (JC) were asked to rate questionnaires. By factor analysis, the cultural identity consisted of 1) attachment and belonging, 2) exploration, 3) inheritance. By covariance structure analysis indicated those both negative and positive evaluations enhanced cultural identity. Exploration and inheritance had positive influence on acceptance of Chinese culture. Attachment and belonging enhances maintenance of one's culture. Acceptance of Chinese culture facilitated intercultural adaptation. To the contrary maintenance of one's culture disturbed it. By comparison between JC and 180 Japanese students who study at university in Japan (JJ), there were not so much difference in cultural identity factors. But JC's self-esteem was stronger than JJ.

問題と目的

問題の背景

日本は島国という地形的条件により、外国人と接触する機会は少なく、そのため自分たちの文化的アイデンティティを意識することも稀であったと考えられる。しかし、近年の経済的發展や科学技術の發達に伴い、人・物・情報の国際移動が急速に活発となってきており、1980年代頃からは、日本人の海外進出と同時に多様な外国人の日本への流入も増え、日本人の異文化接触の機会は飛躍

的に増大した。その中で、日本人の異文化接触と日本人のアイデンティティとを関連付ける視点での研究は、海外帰国子女などの研究以外にはあまり見当たらず、その重要性が指摘されている（新井, 1995）。

文化的アイデンティティとは、ある社会的集団への所属意識を意味し、個人的アイデンティティと区別される。社会的集団には国籍・民族・言語・宗教・文化・職業などがあり、その所属意識が個々に肯定的自己概念を与えるとされる（Tajfel, 1978）。文化的アイデンティティには、所属意識だけでなく、その集団への愛着や誇りといった感情的要素や、「〇〇文化を担った自分」とは何なのかといった疑問や関心、自文化に関する慣習や伝統の遵守などの行動的要素も含まれる。

Tajfel（1978）の社会的アイデンティティ理論によると、人は自分が所属する社会的集団（以下、内集団）を自己概念の源泉とし、内集団の成員であることを強く意識させられる場合には、社会的アイデンティティが優勢になり、集団の特徴に沿った行動を取る。内集団の評判が低いと自己概念を肯定的に保つことが難しくなるので、内集団の評価や社会的アイデンティティを維持・高揚しようとする動機が高まり、内集団の仲間をひいきする現象が発生する。個人の内集団に対する同一視の程度が強いほど、こうした現象も強く表れるとされる（大石, 2001）。

Karasawa（1991）は、日本の専門学校生を対象に、集団への同一視の低い者は内集団への評価が低いと内集団を蔑むが、同一視の高い者はそうでないことを見出し、社会的アイデンティティ理論を検証した。

異文化接触は自分の文化的アイデンティティを問い直す契機であるが、時に自らの文化的アイデンティティが失われる危機感さえ伴う体験でもある（巖谷, 1986）。特に青年期の留学は文化的アイデンティティを鮮烈に意識する体験といえよう（大野, 1990）。外国人からの日本社会や日本文化に関する素朴な質問にさえ答えられなかったことをきっかけに、自分が日本人であることの意味や、自分が生まれ育ってきた国や地域の文化とは何なのか、異文化と自文化との間で自分が取るべき態度・行動とはどのようなものかといった、自問自答を余儀なくされる。Bochner（1972）は、留学生が自文化の代表者として自文化に対する文化的アイデンティティを構築することを、留学生の克服すべき課題の1つとして挙げている（吉, 2001）。他にも、鈴木・井上（1995）は留学生が日本文化を受け容れるという課題と同時に、自らの文化的アイデンティティを修正・確立することの重要性を指摘し、井上・伊藤（1995）は自文化と異文化の双方を重視する統合（integration）という態度が、来日1年目の留学生の異文化適応に最も望ましいことを報告している。これらの研究は、留学生の異文化適応における自文化への文化的アイデンティティの重要性を裏付けるものといえよう。しかし、文化的アイデンティティの詳細な内実を検討されておらず、また、文化的アイデンティティが異文化接触のどのような体験で変化し、異文化適応にどのように影響するのかも明らかではない。

ところで、留学生の異文化接触と文化的アイデンティティに関しても、社会的アイデンティティ理論は当てはまるのであろうか。一二三（2008）は、日本に学ぶ中国人留学生を対象に、日本人の中国人に対する差別や偏見を認知すること及び、関心や期待を認知することのどちらも、中国人留学生の文化的アイデンティティを高めることを検証し、さらに、自分自身の文化的アイデンティティ

ィを模索することで異文化の積極的受容と自文化の保持の両面が強化され、そうした態度が異文化適応を順調に促進することを明らかにしている。

ここで紹介した幾つかの研究は日本の大学に学ぶ留学生たちの調査であった。そこで本研究では、海外に学ぶ日本人留学生の文化的アイデンティティに関して、一二三（2008）の枠組みと同様の調査を行ない、日本人の留学生と日本国内の日本人学生との比較を通し、日本人学生の文化的アイデンティティの特徴を明らかにすることを目的とする。

目的

中国の大学で勉強する日本人留学生を対象に、文化的アイデンティティと異文化適応との関係を明らかにすることを目的とし、次の4点を検討する。

- ① 日本人留学生の文化的アイデンティティはどのようなものか。
- ② 自文化に対するホスト社会（中国人）の評価は文化的アイデンティティにどのような影響を与えるのか。
- ③ 文化的アイデンティティは自文化及び異文化に対する態度（自文化の保持及び異文化の受容）にどのような影響を与えるのか。
- ④ 自文化及び異文化に対する態度は異文化適応にどのような影響を与えるのか。

上の4点を検討するために、本研究では一二三（2008）と同様の質問紙調査を行ない、それぞれの因果関係を仮定する。まず、中国人との交友関係を通して、留学生たちは自文化が中国人にどのように評価されているかを知ることが予想される。そして中国人の自文化（日本文化）に対する評価によって文化的アイデンティティは何らかの影響を受けると考えられる。そしてその文化的アイデンティティの持ち方により、自文化を保持するか否か、異文化（中国文化）を受容するか否か、という自文化・異文化への態度が影響を受けるであろう。さらに、自文化・異文化への態度の取り方により、中国社会への適応感が変化するであろう。以上の関係を表わしたのがFIGURE 1の因果モデルである。

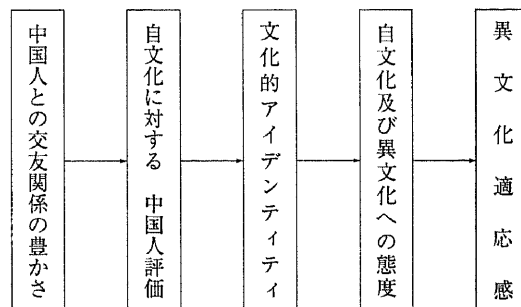


FIGURE 1 文化的アイデンティティと異文化適応感の因果モデル

方 法

被調査者 中国の大学（3大学）で学ぶ日本人留学生（以下、留学生）113名（男性59名，女性54名，平均年齢21.5歳，平均滞日期間25.5ヶ月）から協力を得た。

質問紙構成 本研究では一二三（2008）で作成した中国人留学生対象の質問紙を日本人対象に書き換えたものを用いた。本稿で分析に用いる質問項目は以下の通りである。

- 1) 中国人との交友関係の豊かさ 5項目
- 2) 自文化に対する中国人の評価の認知 12項目
- 3) 文化的アイデンティティ 17項目
- 4) 自文化及び異文化への態度 9項目
- 5) 異文化適応感 25項目

1) 2) については山崎他（1997）を参考にした。

3) についてはPhinney（1992）のMultigroup Ethnic Identity Measure（以下，MEIM）を参考にした。

4) については井上・伊藤（1995）を参考にした。

5) は外的適応感と内的適応感の2側面から異文化適応感を捉え，上原（1988）の在日留学生適応尺度，吉（2001）の適応感尺度，山本・松井・山成（1982）の自尊感情尺度（堀・山本,2001）を参考にした。

回答は全て5段階評定である。

調査時期 質問紙の配布・回収時期は2006年5月から10月までである。

分析 まず，各概念の構造を検討するために，質問紙の1)～5)について固有値1.0以上とした因子分析（主因子法，バリマックス回転）を行なう。次に，各因子を構成する項目を観測変数として，FIGURE 1の妥当性を共分散構造分析により検討する。

結 果

各構成概念の構造

因子負荷量が.30以下の項目を削除した因子分析の結果は以下の通りである。中国人留学生を対象に行なった質問紙調査の分析結果とほぼ一致していた。

先ず，「中国人との交友関係の豊かさ」に関しては，1元性が確認され，「中国人友人の豊かさ」と命名した（TABLE 1）。

自文化に対する中国人の評価の認知」に関しては2因子が抽出され，日本・日本人に対する「差別・偏見」と「関心・期待」と命名した（TABLE 2）。

TABLE 1 中国人との交友関係の豊かさ

	中国人友人の豊かさ
X1 一緒に遊んだり食事したりする中国人友人がいる	.871
X2 個人的な悩みを相談できる中国人友人がいる	.838
X3 中国語や勉強についてアドバイスしてくれる中国人友人がいる	.817
帰国しても付き合いたい中国人友人がいる	.790
中国人との友人関係に満足している	.746

TABLE 2 自文化に対する中国人の評価の認知

	差別・偏見	関心・期待
X4 中国人は日本人をばかにしている	.738	-.169
X5 中国人は日本の伝統や文化を低く評価している	.735	.044
X6 中国人は日本人が皆悪人か犯罪者のように思っている	.706	.077
中国人は日本・日本人への差別意識が強い	.703	-.013
中国人は日本の経済力を低く評価している	.392	.271
中国人は日本の歴史について無知である	.384	-.130
X7 中国人は日本の将来に関心を持ち期待している	.018	.775
X8 中国人は日本の伝統や文化に関心を持っている	-.075	.638
X9 中国人は日本人の習慣や考え方を理解・尊重してくれる	-.139	.609
中国人は日本人に対して好意的な感情を抱いている	-.209	.599
中国人は日本の歴史に関心を持っている	.079	.467
中国人は日本の政治・経済に関心を持っている	.134	.298

「文化的アイデンティティ」に関しては3因子が抽出された。日本の伝統文化や歴史・言語を大切にしようとする「自文化の継承（以下、継承）」、日本人・日本文化への誇りや愛着を感じる「自文化への愛着（以下、愛着）」、日本の文化や歴史を学んだり自分が日本人であることの意味を内省する「文化的アイデンティティの探索（以下、探索）」と解釈・命名した（TABLE 3）。

TABLE 3 文化的アイデンティティ

	愛着	継承	探索
X10 日本人であることを幸せに思う	.805	.107	.082
X11 日本文化や日本人であることをすばらしいと感じる	.765	.361	.142
X12 日本文化や日本人であることの誇り	.754	.216	.245
自分の子どもへの日本人としての誇りの継承	.711	.462	.009
日本・日本人への強い愛着	.676	.445	.142
日本・日本人への強い帰属意識	.582	.272	.161
日本語はとても大切	.336	.273	.099
X13 自分の子どもへの歴史・伝統文化教育	.360	.837	.146
X14 自分の子どもへの日本語・伝統・文化・習慣の継承	.406	.794	.143
日本の文化・歴史について多くを学ぶために努力したい	.355	.645	.366
日本の伝統料理・音楽・文化を大切に感じる	.403	.584	.263
X15 日本人であることの意味の理解	.089	.017	.849
X16 日本の歴史・伝統・習慣を知るために勉強	-.080	.288	.654
X17 日本人であることが人生に与える影響を考える	.246	.175	.632
他国との関係からの日本人であることの意味の理解	.328	.009	.524
日本人であることが人生に果たす役割がわからない	-.061	-.120	.485
日本をより深く知るために他の日本人からの話を聞く	.146	.443	.459

「自文化・異文化への態度」については3因子が抽出され、「異文化の消極的受容（以下、消極的受容）」「異文化の積極的受容（以下、積極的受容）」「自文化の保持（以下自文化保持）」と命名した（TABLE 4）。

TABLE 4 自文化・異文化への態度

	消極的 受容	積極的 受容	自文化 保持
中国人から差別されたくないので中国人と同じよう に行動している	.761	.078	.086
トラブルを起こしたくないので仕方なく中国人の考 え方などに合わせている	.739	-.040	.240
中国にいるので仕方なく中国の習慣や伝統に従っ ている	.696	-.133	.351
X18 せっかくなので中国にいるのだから中国の伝統 行事などに積極的に参加したい	-.084	.852	.064
X19 中国の文化や習慣が好きなので積極的に取り入 れたい	-.053	.593	-.023
X20 中国人の集まるサークルに入って中国人との交 流を深めたい	.044	.536	-.066
X21 中国にいても日本の生活習慣や年中行事を守 っている	.246	.208	.658
X22 中国にいても日本で生活習慣・行動などを貫く つもりだ	.105	-.084	.534
X23 中国にいても中国人と同じよう に行動しようとは思わない	.292	-.135	.359

「異文化適応感」に関しては4因子が抽出された。自分は有能で役に立つ人間だと感じる「自己有能感」、中国人の考え方やコミュニケーションの取り方に慣れてきたと感じる「対人関係習熟感」、勉強に集中し、やりがいを感じる「学業充実感」、自分はこれでいいと満足する「自己肯定感」と解釈・命名した（TABLE 5）。「学業充実感」、「対人関係習熟感」は外的適応感に、「自己有能感」と「自己肯定感」は内的適応感に対応する。

TABLE 5 異文化適応感

	自 己 有能感	対人関係 習熟感	学業 充実感	自 己 肯定感
X24R 私はいつも自分が役に立たない人間だと思 う	.919	-.020	-.122	-.030
X25R 私は全くだめな人間だと思 うことがある	.789	-.071	.010	-.024
X26R 私には自慢できることがあ まりない	.560	-.244	-.111	-.156
私はいろいろな良い素質を持 っている	.533	.099	.013	.468
私は敗北者だと思 うことがある	.484	-.047	-.192	-.038
私は物事を人と同じく にはうまくやれる	.466	.212	-.068	.400
私は他の人と同じく 価値ある人間である	.446	.176	.112	.430
X27 中国人とのコミュニケーションに困 らない	-.104	.785	.019	-.112
X28 最近では中国人と同じ よう に行動できる	-.054	.610	.287	.096
X29 中国人の考え方が理解 できる	-.183	.581	.242	-.074
大学の事務の人たちに 気軽に声をかけることが 出来る	-.134	.504	.235	.084
日本人に対する中国人 の態度に慣れてきた	-.051	.429	.243	.226
X30 自分の大学が好き である	-.153	.250	.749	.086
X31 大学での勉強にやり がいを感じている	-.076	.245	.714	.177
X32 大学での勉強に集中 できる	-.146	.307	.596	.284
大学の先生に気軽に 相談できる	-.030	.335	.423	.178
私は自分に満足して いる	-.141	-.060	.340	.715
私は自分はこれでいい と思 う	-.045	-.008	.199	.701

Rは逆転項目である。

因果モデルの妥当性の検討

仮定した因果モデルの妥当性を共分散構造分析により検討した。因果モデルの構成概念の観測変数には、因子分析の因子負荷量が高いものを用いた。TABLE 1～TABLE 5内の下線を付したものが観測変数である。統計パッケージはAmos 5を使用した。

適合度指標が最も高くなるようにパスを調整し、また、適当でない構成概念（「消極的受容」と「自己肯定感」）は削除して、最終的に得られたパス・ダイアグラムをFIGURE 2に示す（図中の観測変数X_nはTABLE 1～TABLE 5のX_nと対応している）。適合度指標はCFI=.820, PCFI=.739, RMSEA=.076, 構成概念から観測変数への影響指標は.36～.95であり、適切に対応しているといえよう。パス係数は有意または有意傾向のものであり、標準化されたものを示してある。

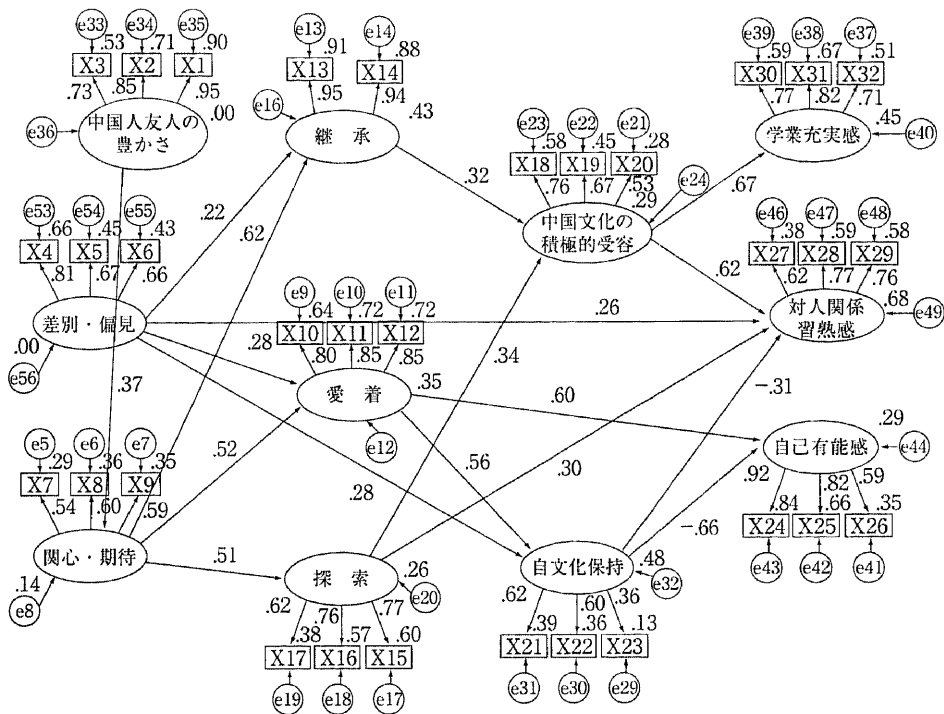


FIGURE 2 文化的アイデンティティと異文化適応感

考 察

本研究の目的は、中国に留学した日本人学生の文化的アイデンティティを明らかにし、ホスト社会の評価と文化的アイデンティティ、さらに、文化的アイデンティティと自文化・異文化に対する態度及び異文化適応との間の因果関係を検討することであった。

FIGURE 2より、「中国人友人の豊かさ」から、日本に対する中国人の「関心・期待」に正のパスが認められる。中国人との良好な交友関係により、中国人が日本に対して関心を持ち、理解しようとしていることを認識することがわかる。

次に、日本に対する「関心・期待」から文化的アイデンティティの「継承」「愛着」「探索」の全てに正のパスが認められた。また、「差別・偏見」からは「継承」「愛着」に正のパスが認められた。これも中国人留学生の調査とほぼ同様の結果であった。自国・自文化に対する肯定的評価が自文化への愛着やそれを継承しようとする意欲、さらに自分の文化的アイデンティティの根源を知りたいという欲求を刺激することは容易に推測できる。一方、中国人の差別的視線や低い評価もまた文化的アイデンティティの感情的側面を強めている。異国で自文化を貶められるような体験をしたとき、その精神的苦痛を乗り越えるために、逆に自文化への誇りを強めることで精神面を支え、逆境を乗り越えようとするのがわかる。言い換えれば、差別や偏見に遭遇することは、文化的アイデンティティの確立につながると考えられる。

次に、文化的アイデンティティのうち、「継承」「探索」は「中国文化の積極的受容」に正の影響を与えている。自文化をしっかりと継承しようということは、自文化の大切さを明確に自覚することである。そうした自覚は、異文化の担い手である相手にとっても彼らの文化が大切であることへの気付きを促すのであろう。また自分の文化的アイデンティティを知的に探求することは、自文化の客観的意識化につながると思われる。自文化の自覚や客観的意識化は、異文化にも目を向け、それを受け容れようとする心の準備を促すことが推測される。一方、「愛着」は「自文化の保持」に正の影響を与えている。自文化をすばらしいと感じることは、異文化の中でも自文化を保持したいという気持ちを強めることは十分推測可能である。

さらに、「中国文化の積極的受容」は、外的適応感である「学業充実感」「対人関係習熟感」に正の影響を与えている。異文化の中にあって中国文化を積極的に受け容れようとする態度は、充実した学業や円滑な人間関係を促進することがわかる。一方、「自文化の保持」は「対人関係習熟感」に負の影響、「自己有能感」に正の影響を与えている。「自文化の保持」に影響を与えているのが、中国人の「差別・偏見」と自文化への「愛着」であること、「愛着」を強める要因の一端に「差別・偏見」が影響を与えていることを鑑みると、自文化を保持することは中国への反感・拒絶感に起因する可能性が考えられる。中国人が日本人・日本文化を差別・偏見の目で見ているという認知は、中国人に対する反感を生じさせ、中国文化の拒否と自文化の固執へと発展し、ひいては中国人とのコミュニケーションなどにも支障を来たす過程が推察される。また自文化に拘泥することにより中国社会の中で中国文化に溶け込めなくなり、そのために無能感や孤立感を深め、結果的に自尊感情も大きく傷つけられることが想像される。これらの結果は、一二三（2008）の、日本文化の積極的受容と自文化保持が異文化適応感を補強しようという中国人留学生対象の調査結果とは異なるものであった。

以下、因果モデルでは仮定しなかったパスについて考察していく。「差別・偏見」から「自文化の保持」「対人関係習熟感」に正のパスが認められた。上でも触れたが、中国人が日本・日本文化を差別し、低く評価していると感じることは、中国への反感や拒絶感を生じさせ、そのことが自文化を保持しようという気持ちを強化すると推察される。また、差別や偏見を認知する背景には、中国人の考え方を理解しているという自負が伴うであろう。そうした自負が、「対人関係習熟感」を強めていると考えられる。

また、「愛着」から「自己有能感」,「探索」から「対人関係習熟感」に正のパスが認められた。自文化を愛し誇りに思うことは、自己への肯定的意識を強めることがわかる。これはTajfelの説を裏付けるものといえる。また、自分の文化的アイデンティティを探索することは自文化への理解を深めると同時に、自国と他国との関係との理解や、自文化と異文化との比較をも伴うであろう。そうした理解を背景に、中国人の考え方や行動の意味の理解が深まり、結果的に中国人との対人関係への習熟感が強まると推測される。

留学生と本国学生との比較

最後に、中国留学の影響を検証するために、中国で学ぶ日本人留学生と日本国内の日本人学生について比較する。比較する項目は、日本に対する中国人の評価と文化的アイデンティティ及び自尊感情である。

被調査者は、中国に留学している日本人留学生113名（先述）と、日本国内の日本人大学生180名（男性55名、女性125名、平均年齢18.8歳）である。因子分析の結果、各因子の構成項目のうち因子負荷量.40以上のものを尺度項目とした各尺度のクロンバックの α 係数は、.73~.90であり、内的整合性は十分であることが確認された。各尺度の構成項目の合計得点を項目数で除した尺度得点についてt検定を行なった。結果をTABLE 6に示す。

TABLE 6 各尺度得点平均値・標準偏差・t検定結果

	留学生(n=113)	本国学生(n=180)	t 値
差別・偏見 ($\alpha = .83$)	2.56 (.82)	2.95 (.89)	-3.82***
関心・期待 ($\alpha = .73$)	2.78 (.64)	2.54 (.62)	3.29**
継承 ($\alpha = .84$)	3.91 (1.04)	4.01 (.75)	-0.95
愛着 ($\alpha = .90$)	3.58 (1.03)	3.64 (.84)	-0.53
探索 ($\alpha = .77$)	2.94 (.80)	2.74 (.70)	2.31*
自己有能感 ($\alpha = .85$)	3.26 (.81)	3.03 (.78)	2.45*
自己肯定感 ($\alpha = .82$)	2.79 (1.16)	2.90 (1.05)	-0.78

()内は標準偏差 † $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

(1) 相手国の自文化に対する評価の認知

「差別・偏見」に関して本国学生のほうが留学生よりも強く感じ、逆に、「関心・期待」に関しては留学生のほうが本国学生よりも強く感じている。留学することで、日本に対する中国人の偏見や差別感が本国にいるときに認知していたほど強いものではないこと、日本への期待が強いことへの気づきが促進されることが示された。中国に留学することで、日本人に対する中国側の評価の認知が、本国で感じていたほど否定的でないことを認識し、より肯定的な方向に変化することがわかる。

(2) 文化的アイデンティティ

「探索」について、留学生と本国学生との間に有意差が見られた。異文化における様々な体験により、それまで空気のように自明のこととして接していた自文化を改めて深く知りたいという欲求が高められるのであろう。一方、「継承」「愛着」のいずれも、留学生と本国学生との間に有意差はなかった。

(3) 自尊感情

「自己有能感」については留学生のほうが本国学生よりも自分の有能性を高く評価している。留学生生活は様々な困難と対峙する体験である。そうした様々な困難を克服することで自分の能力に対する自信を強めることがうかがえる。

まとめ

教育的示唆 本研究では、中国における日本人留学生の文化的アイデンティティの構成要素を検討し、中国人の日本に対する評価、自文化・異文化への態度、適応感との関係を検討した。また、留学生と本国学生との比較を通して、留学が文化的アイデンティティその他に与える影響を検証した。以上の結果より、日本人大学生の文化的アイデンティティに関して次のような示唆が得られよう。

第1に、文化的アイデンティティを高める教育の重要性である。FIGURE 2より、自文化への愛着・誇りは自己有能感を高めることが示されている。これは、自国・自文化に対する誇りや帰属意識を持っていないことが自尊感情をも損なう可能性を示唆している。自己への肯定意識や自尊感情を持っていないことは、決して望ましいことではない。自己への自信や有能感を培うためにも、しっかりした文化的アイデンティティを育成する教育が必要であろう。

第2に、留学による様々な効果が示唆された。日本に対する中国人の差別意識が弱いことの気付き、自文化への深い探索、自己有能感の強化などが、留学の効果として認められた。中国人が日本に対して予想していたよりも差別的でないことを学ぶことは、両国の友好にとっても大きなプラスであろう。また、それまで無意識に受け入れ、あまり強い関心を持たなかった自文化への探求を深めることも文化的アイデンティティ確立には有効である。さらに、異文化の中で苦勞しながらも自立して生活することで自己への有能感を高めることは、青年期の精神的発達を大いに促進するであろう。青年期の留学はアイデンティティの危機を孕む一方で、大変有益であるといえる。

今後の課題 本研究では中国における日本人留学生を対象に文化的アイデンティティを検討し、日本本国の学生と比較した。しかし、被調査者の平均年齢が異なるため、本研究での結果をそのまま留学による影響と断定することは出来ない。今後は同一の被調査者の縦断的調査が必要であろう。また、中国以外の国に留学している日本人についての研究も必要である。今後の課題としたい。

参考文献

- 新井郁男 1995 日本人の異文化接触とアイデンティティ 異文化間教育, 9, 37-51.
 井上孝代・伊藤武彦 1995 来日一年目の留学生の異文化適応と健康—質問紙調査と異文化間カウンセリングの事例から— 異文化間教育, 9, 128-142.
 上原麻子 1988 留学生の異文化適応 言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究 (広島大学教育学部日本語教育学科・留学生日本語教育), 111-124.

- 大野裕 1990 若者の留学体験 青年心理, 84, 45-49.
- 吉元洪 1999 中国人留学生のビリーフ・システムと学習態度・意欲が異文化適応に与える影響
学生相談研究, 20, 143-152.
- 2001 在中日本人留学生の異文化適応に関する研究—ビリーフ・システムと自我同一性の
観点から— 広島国際研究, 7, 183-199.
- 周玉慧 1995 受け取ったサポートと適応に関する因果モデルの検討—在日中国系留学生を対象と
して— 心理学研究, 66, 33-40.
- 鈴木康明・井上孝代 1995 異文化間カウンセリング 渡辺文夫(編) 異文化接触の心理学 川島
書店 159-168.
- 田中共子 2000 留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル ナカニシヤ出版
- 鎌幹八郎・宮下一博・岡本祐子(編) 1997 アイデンティティ研究の展望Ⅳ ナカニシヤ出版
- 早矢仕彩子 1997 外国人就学生の自己認知, 自・他文化への態度が適応感に及ぼす影響 心理学
研究, 68, 346-354.
- 一二三朋子 2006 異文化接触と親の教育方針がエスニック・アイデンティティ及び自尊心に与え
る影響—日本人学生と中国人留学生の場合— 文藝言語研究言語篇, 49, 61-81.
- 2008 留学が中国人学生の文化的アイデンティティに与える影響に関する一考察—中国人
留学生と中国本国の学生との比較を通して— 文藝言語研究言語篇, 53, 1-15.
- 堀洋道・山本真理子(編) 2001 心理測定尺度集Ⅰ サイエンス社
- 堀洋道・吉田富士雄(編) 2001 心理測定尺度集Ⅱ サイエンス社
- 巖岩ナオミ 1986 メタ的な生き方のすすめ 青年と医学, 34, 51-56.
- 山崎瑞紀・平直樹・中村俊哉・横山剛 1997 アジア系留学生の対日態度及び対異文化態度形成に
おけるエスニシティの役割 教育心理学研究, 45, 119-128.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30,
64-68.
- Bochner, S. 1972 Problems in Culture Learning. In S.Bochner & P.Wicks (Eds.), Overseas Students in
Australia. New South Wales: New South Wales University Press.
- Karasawa, M. 1991 Toward an Assessment of Social identity: The Structure of Group Identification and
Its Effects on In-group Evaluations. British Journal of Social Psychology, 30, 293-307.
- Phinney, J.S. 1989 Stages of Ethnic Identity Development in Minority Group Adolescents. Journal of
Early Adolescence, 9, 34-49.
- 1991 Ethnic Identity and Self-esteem: A Review and Integration. Hispanic Journal of Behavioral
Science, 13, 193-208.
- 1992 The Multigroup Ethnic Identity Measure: A New Scale for Use with Diverse groups. Journal of
Adolescent Research, 7, 156-176.
- Tajfel, H. (Ed.) 1978 Differentiation between Social Groups: Students in the Social Psychology of
Intergroup Relations. London: Academic Press.